

子育て支援 道半ば

魚津の未来図

市長選・市議選12日告示

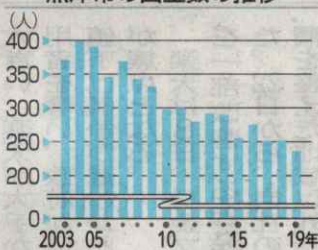
<中>

「かなり危機感を覚える。自然に任せればいいというものではない」「学校のクラスなどいろいろなところに影響して」

市長の村椿晃氏(62)はそう答え、表情を曇らせた。2019年10月の記者会見。19年(18年10月～19年

9月)に市内で生まれた赤ちゃんが過去最少になったことを問われた際だ。人口減に歯止めが掛からない。大きな要因は出生数

魚津市の出生数の推移



「遊び場増やして」

り、19年は初めて250人を下回り、238人となった。

公約の産科断念

村椿氏は19年2月、富山労災病院で準備を進めていた産科開業を断念した。初期投資に約8億3400万円必要で、負担が大きすぎたためだ。公約の目玉として掲げただけに、落胆した市民は多かった。

あれから1年余り。1歳と4歳の子どもを育てる自

魚津総合公園でつくづく親子。出生数の減少は市の課題だ。魚津市三ヶ

営業の女性(34)は「多額の費用を考えると、産科開設に使うのはもったいないとも感じる」と語る。乳幼児と小学生のきょうだいを育てる主婦36は「産科が近くにあれば安心できた」としつつ、「他にもっと充実させるべきことがあると思う」と話した。

多くの母親たちが異口同音に口にするのが、子どもの遊び場不足だ。特に雨天の休日、子どもと過ごせる所が少ないと言ひ、多くの市民が滑川市の施設へ出掛けるという。

一方、1歳の子どもを育てる自営業の女性(40)は「魚津でも日曜保育を行ってほしい」と訴える。「働く母親にはすぐくありがたい。検討してほしい」

村椿氏は1月末、新川文化ホール(魚津市宮津)の敷地に子ども屋型遊び場を建設するよう、県に要請。県は20年度予算で調査費を盛り込むなど前向きに

検討しているが、開設のめどはまだ立っていない。母親たちのニーズを満たす子育て支援策は、道半ばだ。

若い女性が鍵

「人口減の問題に取り組む時、女性の感性が重要になる」と言うのは、内閣府の地域活性化伝道師、澤崎聡さん(60)だ。大阪、魚津市出身だ。「女性が『住みたい』と思う豊かな暮らしのあるまちにしないと若者は出ていく一方だ」

魚津水族館やパークゴルフ場がある魚津総合公園(同市三ヶ)では、市と民間が連携した公園の活性化事業が始まった。中心となる飛世裕香さん(42)同市川縁は1歳の子どもを持つ母親だ。核家族化で孤立する親子もいる中、「幅広い世代が集い、地域で子どもを育てる温かい場所をつくりたい」と語る。

「行政にできるのは施設の充実だけじゃない。孤立しがちな人が集う機会や人と人をつなぐ仕組みをつくってほしい」



政治行政とやま